

イエとうたのねじれ

短歌をもとにした建築設計手法論の展開



二足の草鞋を履く準備として 建築と短歌 研究背景・目的

建築設計において、設計者は短歌から建築が設計できるのではない。本研究及び提案は、私自身が設計者であり歌人である前提に立ち、仮説検証を行った記録である。

短歌を構築物として立ち上げることを試みた筆者の卒業設計を通じ、短歌を建築設計時に用いることの建築設計手法としての可能性について研究する余地があると考えた。短歌とは、五・七・五・七・七の三十一音の言葉のリズムを基準とした短い叙情詩の事であり、日本最古の和歌集『万葉集』の存在から、奈良時代には既に短歌は詠まれていたと考えられる。書肆侃侃房の「新鋭短歌シリーズ」(2013年)や SNS サービス X (旧 Twitter) による短歌の投稿によって、近年より短歌 (特に現代短歌) は若者を中心に関心が寄せられる媒体になりつつある。フランスの科学哲学者・文学批評家のガストン・バシュラールは、科学的認識の獲得のために、前科学的な思考との断絶を求めた「認識論的切斷」で知られている。のちには詩的想像力の領域に論を広げ、イメージや夢想の世界を考察した。『空間の詩学』では、詩的イメージの根源の価値を明らかにするために、詩的イメージとイメージを創造する意識の行為を結合する、新たな想像力の現象学を提唱した。

建築と短歌は全く異なる媒体であるが、どちらも生きた時代を否応なしに反映してしまう表現媒体であることには変わりない。短歌というメディアを建築設計時に用いる可能性について考えることは、筆者の、引いては建築設計者の新たな設計の手立てを提唱することに繋がる。また昨今の「分かりやすさ」を求められる社会状況に対し、建築家も無意識的に傾倒し多様な感受を二の次と見なしている可能性は拭えない。

筆者は建築設計を学びながら、歌人として6年ほど活動している。短歌と建築設計の両者を捉えながら、より豊かな制作・設計に向き合える設計手法を提案し実践することで、双方のまだ見ぬ可能性について提言したい。本設計手法を用いた設計提案によって個々の施主に則した「分かりやすさ」を超えた提案が可能となることを4プロジェクトを通じ検証することを本研究の目的とする。

既往研究・事例

中村登一・堀口捨己の2人の短歌を詠った建築家の言説からは、短歌の建築設計に対する影響は何えるも、自身の建築設計において直接的な因果関係は明示することができないことが分かった。また短歌をその場に示すことで空間や展示との関係を示した各事例では、短歌を体験する糸口としての空間、空間をより理解するための短歌の掲示、などAのためのBという主従関係が前提として受け取れる事例があった。これを踏まえ、建築家兼歌人の建築と短歌を同じ地平で眺めたスタジオでの設計提案を試みることにする。



南郷町収蔵 (1954) 中村登一



『短と建築・短歌』中村登一



桂離宮見学
<https://morioka.sakura.ne.jp/0027/nao003/nao003.htm>



奈良県春日大社博物館



宮田紗希「山風と記憶を語る家」2018年

これまでの設計提案における建築と短歌の関係 2年間の設計提案の変遷

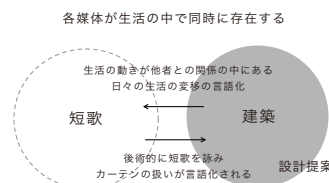
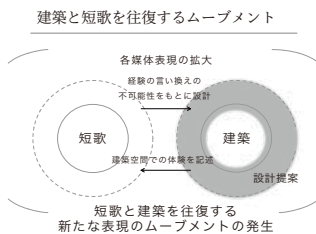
一対一対応型



敷地分析目的型



短歌起点計画型



卒業設計 建築を詠む
(2022)



五三会建築設計競技 テーマ：家とは何か
いつもの明日 家は詠う
(2023)



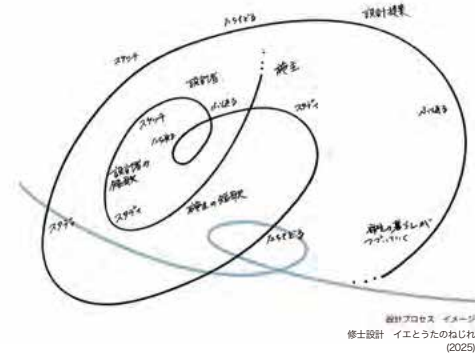
ボラスコンペ テーマ：個が際立つ新しいシェアの街
カーテンは生活を詠う
(2024)

卒業設計『建築を詠む』では、皇室行事歌会初めにおいて選出された短歌73年分から、一年ずつランダムに短歌を選出し、それぞれの短歌から着想を得てフォーリーとして毎年立ち上げ続ける計画を皇居外苑を敷地とし提案した。コンセプトualな造形へ落とし込むまでの歌の機微が拾いきれなかったこと、短歌から形に起こすときの翻訳の荒さが目立つ案であった。これを踏まえ、家とは歌の重なりであるという仮定のもと、五三会設計競技『いつもの明日 家は詠う 生活はうたの姿たりう

か』を提案した。前橋市の市街地を敷地とし、施主家族の将来像や敷地で受け取ったイメージより5首の短歌を詠う。それらから分棟形式の住宅を設計した。前回より、短歌とボリュームの関係は分かりやすくなったが、分かりやすすぎるのが問題点になった。また、施主像も設計者側の想像に過ぎず、設計者内での自己循環の中で短歌が利用される構図を自ら作ってしまっ。これを踏まえ、ボラスコンペ『カーテンは生活を詠う』を提案。誰が隣に住んでいるか分からない集合住宅の現状に対

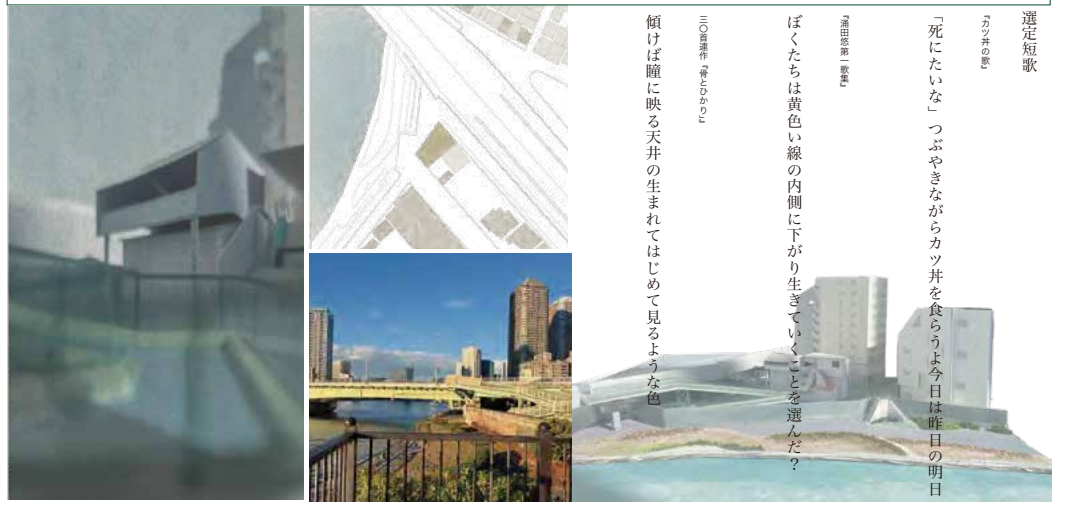
して、カーテンのレイヤーから透けて見える隣人像の重なりから、抒情が生まれると仮定し、計画した。しかし、連綿と続く生活の中で、設計者が住まう人を想像し、計画するという過程において、住まう人のこれまでの生活像・人間像を汲み取ることができていなかった。これらの設計提案を踏まえて、修士計画を練り直した。それぞれの計画の後から名付けを行い、改めて俯瞰した上で建築と短歌の健全な関係を模索を行った。

建築と短歌 両者を同じ地平に浮かべて
修士設計 設計方法



ねじれ螺旋型

これまでの設計提案、既往研究を踏まえて、短歌と建築は設計者と施主を繋ぐ柔な、しかし確かな足取りを繋ぐ橋として捉えて、橋を渡り互いを往復しながら両者の相互理解を進めた。ぼんやりと計画を立ち上げていくプロセスにこそ、この営みの醍醐味があると仮定し、媒体を相互に行き来しながら、これまでの通常の住宅設計とは異なる言語のやりとりを経て行く本提案の考案に行き着いた。これまでで最もシンプルな施主と設計者、短歌と建築の関係に落ち着いた。計画の途中で、改めて短歌に立ち返ってみる。計画を短歌から派生してずるずる広げてみる。この往復の中で、計画自体の確からしさの感触を得ながら、イメージを育てていく。またこれまでの計画の反省として、短歌から建築への形のジャンプが激しいことが問題として挙げられた。今回は、短歌の世界を描写した絵と、施主と設計者の間をぼんやりと埋めるような絵のプロセスを残した。絵もその世界を独立して持っており、互いの未知な全体像の理解の足がけになる。修士設計では各施主に向けて4つの住宅を設計提案する。

横須賀の家 敷地：神奈川県横須賀市大津町5丁目 施主：島田修二 選定短歌 『花火の星 胡蝶蘭館 (1983)』 生生の濃美より 生活の内なる濃淡あらんかと俯瞰する家いづれも端正 『金魚 笠井社 (1977)』 境界より 妄想の日々続くなりおのづから身を灼くまでの一語またねば 『海の家 花井社 (1983)』 時のちからより 窓下に幼き蜥蜴の世の中の窺ひてゐる生のきらめき 	佃のスタジオ 敷地：東京都中央区月島1丁目 施主：涌田悠 選定短歌 『ツツメの家』 「死にたいな」 つぶやきながらカツ丼を食らうよ今日は昨日の明日 『涌田悠 選定』 ばくたちは黄色い線の内側に下がり生きていくことを選んだ？ 三〇番作『まじかみ』 傾けば瞳に映る天井の生まれてはじめて見るような色 
月夜野のアトリエ 敷地：群馬県利根郡みなかみ町上牧 施主：宮沢麻莉奈 選定短歌（黒字：宮沢 灰字：家村） とほけてさわからないフリ続けるの答えが出たら終わっちゃうでしょ 焼き付けてもゆ足はまだ透けていそ山山星雨庭椿 白い朝浮べる花垂陰と陰雲居のおもひではらりはらり 朝露に溶けた昨日の意味を知る照る月なみの陰とおもへば 手紙をしたためる 某日 鷹の飛ぶままに線を描く 	立川町通りの店と家 敷地：群馬県前橋市千代田町3丁目 施主：金山杏奈 金山慎太郎 選定短歌（一〇四首…金山杏奈 五〇七首…金山慎太郎） 咲く花も影らまぬ蕾も等しく愛でるまなざしは陽の光 俯いていながら前を向いているピントはほんのその先にある どんぐりの背を比べましよう意外と丸いのかもよとがつてるかもよ 顔見知り以上しがらみ未満の名無しの権兵衛久兵衛佐助 扇風機風鈴の音で夏しのぎ灯油の匂いと共に越す冬 風鈴が上書きされる鯉の声寒暑の戦い負けるな風鈴 Googleよお前にまだまだ負けないぞ答えは思索の中のみにある 【二人が共通して好きな短歌】（宇都宮敦） だいじょうぶ急ぐ旅ではないのだし急いでないし旅でもないし 



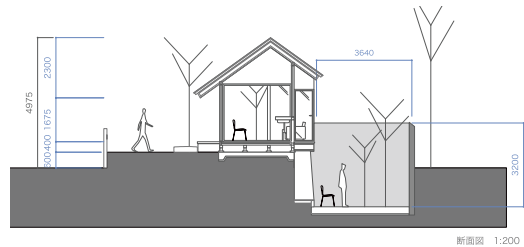
妄想の日々続くなりおのづから身を灼くまでの一語またねは
世界の描写 I アクリル、炭 694x538mm



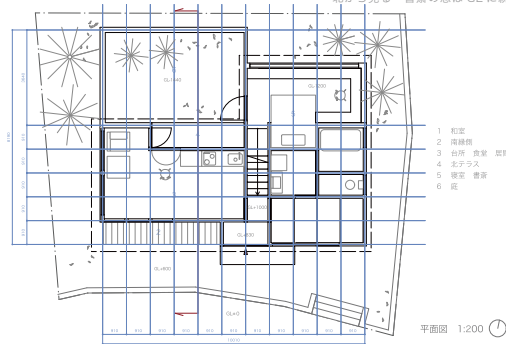
北から見る 書斎の窓は GL に続く



傾けば壁に映る天井の生まれてはじめて見るような色
世界の描写 II アクリル、スプレー、灰 1000x803mm



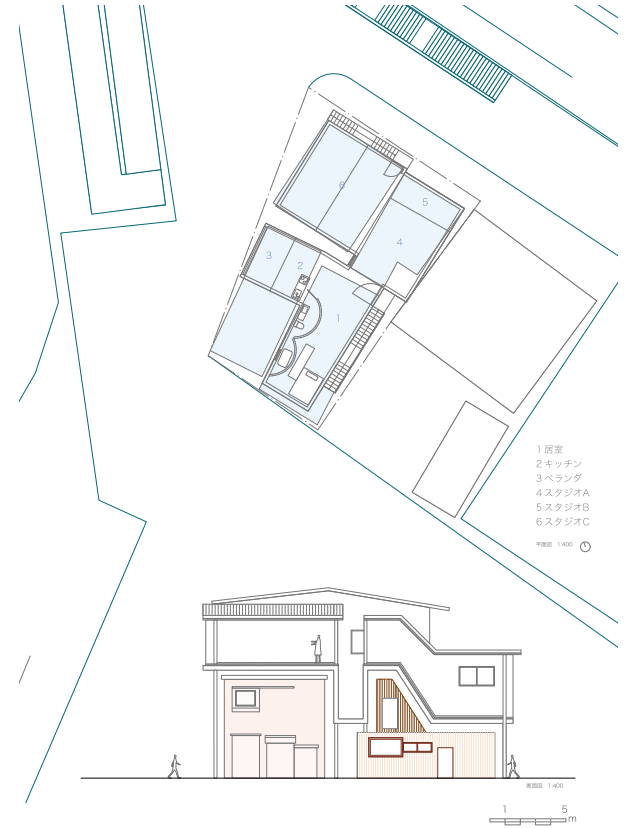
断面図 1:200



平面図 1:200

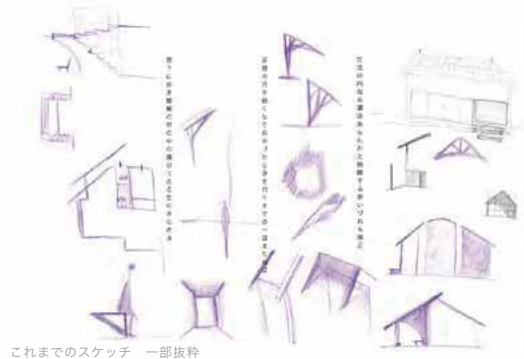


隅田川から見る 既存倉庫・工場の屋根の勾配を拾った床が広がる

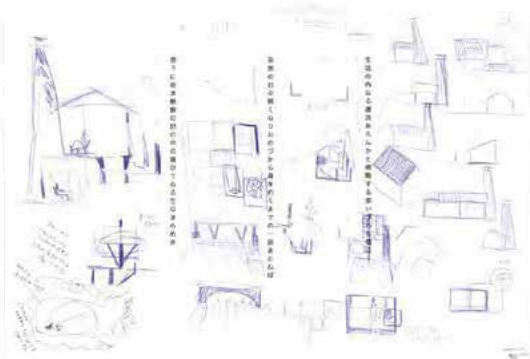


1 居室
2 キッチン
3 ベランダ
4 スタジオA
5 スタジオB
6 スタジオC

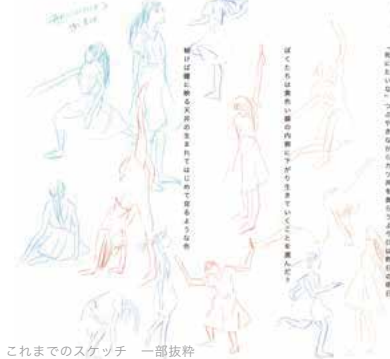
1:400



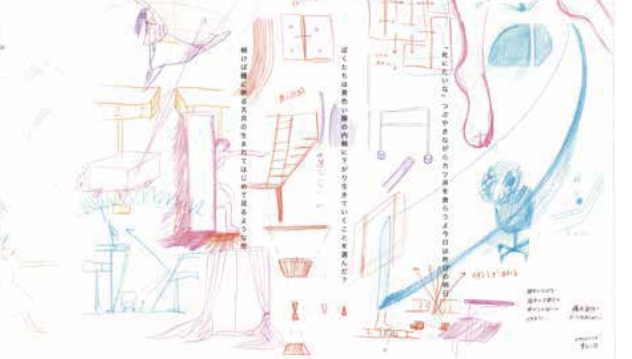
これまでのスケッチ 一部抜粋



これまでのスケッチ 一部抜粋



これまでのスケッチ 一部抜粋



これまでのスケッチ 一部抜粋

横須賀の家 敷地：神奈川県横須賀市大津町5丁目

施主：島田修二



横須賀生まれの昭和の歌人・島田修二の故郷に、島田が新聞社を五〇歳で、退職後亡くなるまで過ごす終の住処を設計した。施主は既にこの世を去っており、本計画は、あり得たかもしれない可能性の提示となる。既に亡くなっている歌人を施主に設定している。作歌に集中するために、歌人として生きていくことを苦悩の上決断し、50歳して、退社を意識し出した頃に詠った短歌を筆者が3首選出し、退社後の、あり得たかもしれない島田の一人暮らしの住まいを提案する。

計画
最後にディティールの話に落ち着くとは理解しつつ、建築の構成の段階でどこまで短歌のニュアンスと一致させられるか考えた。短歌の中で現実と可視化できるもの(蜥蜴・俯瞰する家)・できないもの(一語・生の煌めき)を改めて確認し、現実に見えないものの力強さ・果てしなさを体感できる場が必要だった。半地下から地下へ。現実とのずれをGLとの差で計画した。

佃のスタジオ 敷地：東京都中央区月島1丁目

施主：涌田悠



撮影者：加藤市

実際に歌人として作家活動が続ける方。生業としてダンスも行っているため、住居とダンススタジオを兼ねた提案を行う。先日まで、AIRの取り組みとして、世田谷美術館で滞在制作をしており、日々建築空間とからだで対峙する中で「日常とアート」が混ざり合う空間を探究している。自身の歌を元にしたダンス作品も拝見した上で、身体と歌の響きを揃い上げながら、都市の中での新しい建築のあり方を提案する。

計画
社会の枠組みや世間の眼差しが厳しくなればなるほど、その反動かもしれないが、網目を掻い潜り、世界の美しさが涌田さんの歌からは滲み出てきてしまう。歌をもとに都市の中で住まうことを計画した。既存の倉庫群の上に縁は切れているが影響を受けている形でボリュームを計画している。床は屋根勾配を拾い、特異な床で、または街に出て、踊り歌える将来を想像した。

